アート・アスレチック教育 ニュースレター

東京学芸大学 アート・アスレチック教育センター
CAAAE Center for Applied Arts and Athletics Education

Topics ▶▶▶ ふれあう世界、こえる未来～特別支援教育とパラスポーツが出会うとき～
/映画上映会 Vol.1 /共催・協賛事業報告 /CAAAE教員日記

ニュースレターVol.11では、本学卒業生でありパラリンピアンの西田杏さんをお招きした講演会や、カフェでの映画上映会の様子など、10月～11月にかけて実施した事業についてご報告します。

ふれあう世界、こえる未来～特別支援教育とパラスポーツが出会うとき～

2025年11月5日（水）、東京学芸大学 芸術館 学芸の森ホールにて、アート・アスレチック教育センター主催イベント「ふれあう世界、こえる未来」を開催いたしました。

本イベントでは、本学卒業生でパラリンピアンの西田杏さんをはじめ、パラスポーツコーチ、特別支援教育の専門家等をお招きし、障がいの有無や立場の違いをこえて「ふれあう」ことから生まれる学びや新しい視点について、現場での実践報告や専門的知見あわせて深めていく場となりました。

第1部では、本学卒業生の西田杏さんによる講演「わたしとパラ水泳」を実施。水泳競技との出会い、トレーニング、パラリンピック出場にいたるまでの活動について語ってくださいました。続いて、江田裕介氏（東京家政学院大学教授）による「パラスポーツとアシスティブテクノロジーの変遷」では、義手・義足のテクノロジーの進化に関する発表が行われました。松山直輝（本センター講師）による「特別支援教育×スポーツ科学のイノベーション」では、特別支援学校の生徒にスポーツ型ウェアラブル端末を活用したジョギング指導の実践について報告しました。酒井泰葉氏（日本障がい者スイミング協会代表理事）による「障がい者水泳から見える、教育の可能性」では、ご自身の水泳指導の事例から教育の可能性についてお話しいただきました。

第2部では、「障がい×体育・スポーツの現在と将来的な可能性」をテーマにパネルディスカッションを行い、登壇者4名のそれぞれの専門的な立場から活発な意見が交わされました。

映画上映会「サティシュの学校ーみんな、特別なアーティスト」 Vol.1

10月29日（水）に学内のnote cafeにて、映画上映会を行いました。地域連携プロジェクトの１つとして、今回初めて企画するようになりましたが、学生・教員13名、社会人1名の参加がありました。サティシュ・クマールという教育思想家の語りが中心であり、＜本来の教育とは、知識を詰め込むことではなく、アーティストとしての自分に気づくこと＞＜想像力を働かせて自らの手でつくりだすことで自分もまたつくられていること＞などが語られ、参加者たちにさまざまな気づきを与える映画でした。映画上映後の対話も大変盛り上がり、考えを深めるよい時間となりました。

お菓子づくりワークショップ「《ヘンゼルとグレーテル》に登場するお菓子をつくろう！」【主催事業】

CAAAEと二期会BLOCポケットオペラとの共同オペラ・プロジェクト《ヘンゼルとグレーテル》の一環として、辻調理師専門学校東京の協力を得て、お菓子づくりのワークショップを行いました。地域の親子や本学学生などを含め、24名の参加者が型抜きをしたり、デコレーションをしたりして、袋いっぱいのジンジャークッキーをつくり、同校と本学との良い交流の場となりました。オペラの公演（12月20日）では、舞台に投影するお菓子の家の製作でもご協力を頂くことになっています。

共催・協賛事業報告

東京学芸大学 合唱特別講座　講師：田中達也先生　【共催事業】

日時：12月2日（火）13:00-18:00 於：芸術館 学芸の森ホール　主催：音楽科教室

本学の卒業生でもあり、全国的に広く作品が歌われている作曲家の田中達也氏を講師にお招きし、恒例の合唱講習会が行われました。『光のかたち（詩：原田勇男）』『声が世界を抱きしめます（詩：谷川俊太郎）』等の作品を学生が演奏し、楽曲の分析や創作の背景などのお話を頂き、大変充実した会となりました。今回演奏された「合唱」という作品は、2017年の合唱講座に谷川俊太郎氏を講師としてお招きしたのがご縁で書き下ろされた詩に作曲されたもので、これまでの合唱講座の歩みが重なり合う講習会となりました。

合唱講座

コラム CAAAE 教員日記

石川 裕司 （音楽・演劇講座　准教授）

「箏の構造や多様な奏法に目を向けた学習」

2025年11月下旬にSTEAM教育体験講座「音でつながる理科と音楽」を開智所沢中等教育学校で実施しました。1時間目の理科「音の仕組みと楽器の工夫を学ぼう」では音の正体を実験で確かめ、手作り楽器などを通して音の性質を体感し、続く2時間目の音楽「箏の性質を生かして演奏を工夫しよう」では、理科の学びを生かしながら実際に箏を演奏して音楽表現を深めるという構成で行いました。（理科監修：小林晋平教授、講師：教職大学院２年塙正之さん、音楽科監修・講師：石川裕司）

箏には基本的な弾き方以外にも多様な奏法があり、一般的に美しいとされない音（噪音）も価値ある音とみなして曲中で頻繁に用いられます。そうした音（噪音）をも了承するのは、松虫やコオロギといった秋に鳴く虫の声までも愛でる日本人の特徴にあると言われることがありますが、今回の講座ではそうした音（噪音）を生徒が受容することも1つの軸としました。箏爪の端で擦り鳴らす「擦り爪」や「散らし爪」、左手の爪を糸の下に当ててジジジと鳴らす「消し色」といった音（噪音）を欲した作曲家の心のありようについて、現代に生きる子どもが思いを巡らせつつ箏を演奏することはとても意義深いことだと考えます。講座での生徒の様子や振り返りシートの記述から、箏の構造や奏法は、音の仕組みを科学的に理解することと親和性があることを改めて感じることができました。

日常で日本音楽に触れられる機会は少なく、音楽科の学生でも日本音楽をある種異文化的に捉えてしまう様子が見受けられます。科学的な視点をもって和楽器に触れる理科×音楽による横断的な学びが日本音楽を自文化として捉える一助となりえないものか、日々考えています。

アート・アスレチック教育 ニュースレター　Vol.11
発行：東京学芸大学アート・アスレチック教育センター（CAAAE）
連絡先: tgu_caaae@u-gakugei.ac.jp
発行日 2025/12/11　編集：岡田理佐子・齋藤真智子・松山直輝　デザイン：山本明